

れぞれ score 4, 3 の再発を認めた。

【考察】 Crohn 病術後症例に対する免疫調節剤は、再発予防効果が十分とはいえず、特に内視鏡的な緩解の維持においては厳しい結果であった。今後、インフリキシマブの効果も含め、臨床的、内視鏡的に経過観察していく予定である。

4 当科における潰瘍性大腸炎に対するタクロリムス治験 4 症例の結果とその後

早川 雅人・本間 照・田中由佳里
松澤 純・杉山 幹也・夏井 正明
姉崎 一弥・渡辺 雅史

県立新発田病院内科

中等症又は重症の難治性潰瘍性大腸炎患者に対してタクロリムスによる緩解導入を行った 4 症例についての結果とその後を報告する。

対象は中等症又は重症の難治性潰瘍性大腸炎患者で投与期間は最長 12 週間、病型は左側大腸炎、又は全大腸炎型、タクロリムス目標トラフ濃度は 5 ~ 10ng/ml であった。

全 4 症例のうち 2 例が重症、2 例が中等症で 4 症例中 3 例が羅病期間 10 年以上で、うち 2 例は 9 年間の緩解維持後の再燃でステロイド依存性になっていた。

結果は 4 症例中 3 例が 1 ヶ月以内に緩解し、1 例は緩解導入できなかった。緩解導入できた 3 例で 2 例が 1 年以内に再燃し 1 例は治験終了後の約 7 ヶ月再燃しなかった。難治性潰瘍性大腸炎の緩解導入療法においてタクロリムスは有効であり、効果発現までの期間も速やかであった。しかし、臨床症状のみならず粘膜治癒が確認できなければ投与終了後直ちに再発した。一方、粘膜治癒が確認できた症例では長期に緩解維持が可能であった。

5 当科における難治性潰瘍性大腸炎治療の現状

杉村 一仁・相場 恒男・河久 順志
濱 勇・横尾 健・米山 靖
和栗 暢生・古川 浩一・五十嵐健太郎
月岡 恵

新潟市民病院消化器科

【背景】 難治性潰瘍性大腸炎は、ステロイド抵抗性と依存性症例から成っているが、その自然史は不明な点が多い。

【対象】 新潟市民病院に通院中で、長期に経過の追える 34 名 108 回の再燃についてステロイド依存性と抵抗性についての検討を行った。

【結果】 抵抗性の獲得時期は症例によって異なっていた。再燃を繰り返すに従い、ステロイド依存性が出現した程度も悪化する傾向にあった。さらに再燃を繰り返すに従い、ステロイド抵抗性獲得の引き金となる傾向が認められた。ステロイド抵抗性は、ステロイド依存性のみの症例に比し、有意に手術率が高率であった。

【結語】 潰瘍性大腸炎の頻回の再燃や活動期の長期化は、難治性を悪化させる可能性がある。難治化を予防するためには適切に緩解維持を行う重要性が示唆された。

Ⅲ. 特別講演

潰瘍性大腸炎とクローン病診療の現状と将来

慶應義塾大学医学部消化器内科 教授

日比紀文

近年わが国における炎症性腸疾患の患者数は増加の一途をたどっているが、その根本的原因は未だ不明である。遺伝的因子は欧米において指摘されている疾患関連遺伝子の異常はわが国では認められておらず、遺伝的背景の相違がみられる。一方、我が国の高度成長期以後の食生活の変化は、炎症性腸疾患患者数の増加とその時期がほぼ一致しており、食事や喫煙などの環境因子が、炎症性腸疾患の病因・病態に深く関わっていると考えられる。潰瘍性大腸炎とクローン病の病態にはいくつかの共通項があるとはいえ、最近の研